

出品作品リスト

出品番号	作品名	産地	時代	法量(cm)	田中丸コレクション№
1	絵唐津木賊文茶碗	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ9.7 口径14.7 高台径6.2	006
2	絵唐津菖蒲文茶碗〔重要文化財〕	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ9.7 口径15.7 高台径6.1	005
3	奥高麗茶碗 銘「舟越」	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ9.2 口径12.0 高台径6.3	003
4	奥高麗茶碗 銘「閑窓」	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ9.1 口径12.5 高台径4.8	004
5	唐津緑釉茶碗 銘「岸波」	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ6.8 口径12.0 高台径4.8	010
6	瀬戸唐津茶碗 銘「波鼓」	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ6.0 口径15.4 高台径5.1	011
7	三島唐津茶碗 銘「蓬菜」	唐津焼	17世紀前期	高さ8.7 口径13.0 高台径6.1	009
8	唐津櫛刷毛目花入	唐津焼	17世紀前期	高さ24.4 口径9.2 底径12.2	091
9	朝鮮唐津手付水指 共蓋	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ28.3 口径13.7 底径19.7	030
10	絵唐津点文水指	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ13.0 口径12.2 底径10.5	084
11	三島唐津水指	唐津焼	17世紀前期	高さ17.2 口径13.6 底径11.4	083
12	絵唐津草文三足鉢	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ5.6 口径18.3	071
13	絵唐津松梅文皿	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ4.1 口径18.3 高台径5.0	072
14	絵唐津草花文筒形向付 五口	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ9.0 口径5.2 高台径4.1(各)	047
15	絵唐津草花文向付 五口	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ6.0 口径16.7 高台径6.0(各)	048
16	絵唐津徳利	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ20.1 口径5.2 底径9.6	079
17	朝鮮唐津徳利	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ13.0 口径3.0 高台径6.5	041
18	唐津皮鯨ぐい呑	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ5.7 口径7.5 高台径3.7	096
19	斑唐津片口ぐい呑	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ5.1 口径9.2 高台径3.8	100
20	斑唐津ぐい呑	唐津焼	16世紀末～17世紀初期	高さ5.5 口径7.5 高台径4.0	102
21	筋文茶碗	高取焼	17世紀前期	高さ7.6 口径14.7 高台径5.8	292
22	褐釉肩衝茶入	高取焼	17世紀初期	高さ9.0 口径3.4 底径4.0	277
23	道化釉丸壺茶入	高取焼	17世紀前期	高さ5.8 口径2.5 底径3.1	282
24	飴釉長茶入	高取焼	17世紀前期	高さ10.4 口径2.5 底径3.6	285
25	褐釉耳付花入	高取焼	17世紀初期	高さ26.9 口径9.0 高台径12.8	028
26	藁灰釉緑釉菱口耳付水指 銘「若葉雨」	高取焼	17世紀初期	高さ19.1 底径15.3	309
27	菱口水指	高取焼	17世紀後期	高さ13.7 口径17.7 底径10.5	288
28	四方水指	高取焼	17世紀末～18世紀初期	高さ14.8 口径17.9 底径14.6	291

出品番号	作品名	産地	時代	法量(cm)	田中丸コレクション№
29	黄釉白鷺盃洗	高取焼	18～19世紀	高さ12.9 口径19.4 底径8.6	304
30	茶碗 銘 小倉焼	上野焼	17世紀初期	高さ8.9 口径10.6 高台径5.3	315
31	斑釉茶碗 銘「みやぎの」	上野焼	17世紀初期	高さ7.6 口径15.0 高台径5.5	313
32	藁灰釉耳付水指	上野焼	17世紀初期	高さ16.5 口径15.6 高台径12.1	314
33	灰釉手付水注	上野焼	17世紀初期	高さ13.5 口径13.4 底径12.7	086
34	象嵌文茶碗	八代焼	18世紀	高さ7.3 口径12.9 高台径5.9	391
35	褐釉肩衝茶入	八代焼	18世紀	高さ9.3 口径2.9 底径5.5	390
36	象嵌菊文四方鉢	八代焼	17世紀後期	高さ4.3 口径23.8×24.6	392
37	三島手陶枕	八代焼	明和9年(1772)	高さ12.7 長さ20.4 幅6.5	389
38	菊形皿 十枚	八代焼	18世紀	高さ5.2 口径18.6×13.3 高台径6.8	386
39	茶碗 銘「白波」	小代焼	18～19世紀	高さ8.2 口径16.5 高台径5.7	381
40	伊羅保写茶碗 銘「石清水」	小代焼	18～19世紀	高さ8.5 口径15.8 高台径6.1	378
41	足付輪花鉢	小代焼	17世紀	高さ5.7 口径29.2	379
42	染付松竹梅図茶碗	薩摩焼	18世紀	高さ8.8 口径10.5 高台径4.7	399
43	茶碗 銘「若草」	薩摩焼	17世紀	高さ7.5 口径12.4 高台径4.5	398
44	黒釉肩衝茶入 銘「サイノホコ」	薩摩焼	17世紀初期	高さ11.9 口径3.0 底径4.4	394
45	刷毛地抱銀杏文輪花皿	現川焼	17世紀末～18世紀前期	高さ4.7 口径18.5 高台径9.6	353
46	打刷毛地帆船文隅切四方皿	現川焼	17世紀末～18世紀前期	高さ3.6 口径15.3 高台径9.2	355
47	打刷毛地野菊文隅切四方皿 五枚	現川焼	17世紀末～18世紀前期	高さ4.5 口径19.0 高台径7.5	358
48	備前写茶碗	柳原焼	18～19世紀	高さ6.6 口径12.8 高台径4.7	328
49	斗々屋写茶碗	柳原焼	18～19世紀	高さ6.0 口径15.4 高台径4.5	329
50	詩文香台	鵬ヶ崎焼	19世紀初期	高さ7.2 口径3.5 底径4.6	373
51	龍文長形合子	鵬ヶ崎焼	文化5年(1808)	高さ1.7 長さ16.0 幅2.4	371
52	御本立鶴写茶碗	志賀焼	19世紀	高さ6.8 口径9.9 高台径4.8	317
53	御本手松竹梅文茶碗	志賀焼	19世紀	高さ8.6 口径11.1 高台径5.0	319



〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6  
TEL 092-714-6051(代表) FAX 092-714-6071  
www.fukuoka-art-museum.jp

たなかまる  
田中丸コレクション  
九州の古陶に魅せられた  
田中丸善八の眼

**会期** 2025年4月23日|水|-2025年6月22日|日|  
**会場** 古美術企画展示室  
**共催** 一般財団法人田中丸コレクション



出品No.2 絵唐津菖蒲文茶碗〔重要文化財〕



出品No.1 絵唐津木賊文茶碗



出品No.16 絵唐津徳利



出品No.19 斑唐津片口ぐい呑

田中丸コレクションは九州で玉屋デパートを経営した田中丸善八(1894-1973)が、およそ40年の歳月をかけて蒐集した九州古陶磁のコレクションです。

本展では、福岡市美術館に寄託している所蔵品の中から、53件を選びすぐり展示します。このリーフレットでは、田中丸善八が九州古陶磁に興味を覚えたきっかけや蒐集の様子、そして、多くの財界人や文化人を自宅に招いて、蒐集品を宴席の「器」として用いた様子を紹介いたします。





田中丸善八 (1894-1973)

### ■九州古陶磁との出会い

田中丸がはじめて九州の古陶磁に興味を覚えたのは、南洋貿易に携わっていた20代前半の頃です。

田中丸家はもともと佐賀の牛津（現在の佐賀県小城市牛津町）で呉服商を営んでいましたが、大正時代になると事業を拡大し、貿易業へ進出します。

大正6年(1917)、23歳の田中丸は、その南洋貿易の視察で香港や上海、南洋諸島を巡る途中、オランダ統治下にあったジャワ島に寄港します。小さな露店が所狭しと並ぶパタヴィアの市場を歩いていると、ひときわ目をひく色鮮やかな壺に魅せられます。現地の焼物だろうと思いつながら、しげしげと眺めていると、「こいは有田の柿右衛門ばい」と同郷の支配人から教えられ、故郷の佐賀で柿右衛門という美しい焼物が作られていたことを初めて知ることになります。

帰国後は、東京の青山に移り住み、アメリカに南洋貿易の代理店を設立するための準備に奔走する日々を過ごしていました。

そんなある日、鯉の焼ける匂いに誘われ、と或る鰻屋の暖簾を潜ります。しばらくすると目の前にはふっくらと焼きあがった蒲焼が運ばれてきたのですが、田中丸は蒲焼ではなく器の方に目を奪われます。それは青みがかった淡い緑色の皿で、まるで翡翠のような美しい釉色にうっとりし、しばらく箸も付けずに見入っ

ていました。店の主人に尋ねると「佐賀藩が焼いた鍋島青磁」だと教えられ、それ以来、好物を食べるたびにその鍋島青磁の皿を思い出し、また料理を引き立てる器というものにも関心を抱くようになったと言います。

実際に田中丸が九州の古陶磁を蒐集し始めるのは、その15年後の昭和7年(1932)、38歳からですが、その間、仕事は多忙を極め、美術品に目を向ける暇はありませんでした。

田中丸家は第一次世界大戦後のいわゆる戦後恐慌によって、貿易業からは撤退し、これを機に百貨店業へ進出していきます。大正9年(1920)に佐世保、大正14年(1925)に福岡、昭和8年(1933)に佐賀、昭和12年(1937)には小倉に玉屋デパートを開店させます。

### ■九州古陶磁の蒐集

田中丸の蒐集は、百貨店業が軌道にのった昭和7年頃から徐々に始まります。しかし、当初は九州古陶磁に絞り込んだ本格的なものではなく、柿右衛門や鍋島、古伊万里などの肥前磁器のほか、刀剣や文人画、洋画などあらゆる美術品を集めていたようです。なかでも大折の画家佐伯祐三の油絵には、かなり熱を入れていました。

そうしたなか昭和12年(1937)、43歳の時に「絵唐津木賊文茶碗」（出品No.1）を手に入れます。それまで古陶磁では色鮮やかな肥前磁器にしか興味を持たなかった田中丸が、古唐津を入手したのはこれが初めてです。入手後まもない昭和15年(1940)に福岡県久留米市で開催された「九州古陶展」にこの茶碗を出品したところ、愛陶家の間で絶賛され、古陶の美を見極める`眼、に自信をつけます。

このことがきっかけで田中丸は、本格的な蒐集に向けた構想を練り始めます。

「肥前陶磁を中心とした九州各地の古陶磁」に的を絞り、それもただ単に名品だけを集めたコレクションではなく、その焼物の前期、中期、後期といった歴史の流れがわかるように集めること。つまり美術的かつ系統的、網羅的な九州古陶磁のコレクション――。

田中丸はこの構想をある人物に話します。

その人物とは、佐賀の武雄出身で西海山人や陶片と号していた金原京一（1897–1951）でした。

金原は大正10年(1921)頃から佐賀の地に眠る古窯跡を一人で探し歩いては陶片を採取し、その成果を

『肥前古窯址図』（昭和7年(1932)発行）、『肥前古窯址めぐり』（昭和10年(1935)発行/水町和三郎との共著）として発表するなど、九州古陶磁の調査に取り組む草分け的な研究者でした。

この構想に共感した金原は、田中丸の蒐集の`学術的な部分、を支え、以降、二人三脚で九州の古陶を探し求める日々を過ごすこととなります。

そして、戦後間もない昭和26年(1951)、田中丸は福岡の玉屋デパートの4階に展示室を設け、無料で一般公開を始めます。福岡市内には禾だ美術館や博物館が無い時代です。

木製の展示ケースには蒐集した九州古陶磁がずらりと並び、金原による古窯跡地図とキャプションが添えられ、そのキャプションには作品名・寸法・焼成時代・焼成した窯とその所在地、そして解説が記された本格的なものでした。

この展示室は全国の愛陶家や研究者たちの間で評判を呼び、福岡に来たら必ず観ておかなければならない場所として、言うなれば九州古陶磁の`メッカ、のような様相を呈していたのです。

しかし、その矢先のことでした。田中丸の蒐集を支えた金原はこの年、55歳という若さで亡くなるのです。

### ■古陶磁を用いるということ

田中丸の蒐集はその後も続けられました。

終戦後の混乱期に旧家から古美術品が流出し市場に溢れたことで、さらに拍車が増かり、その蒐集品のターゲットは茶道具にまで広がっていきます。

自宅「松風荘」の敷地に茶室「松風庵」を建て、点前の稽古にも励み、頻繁に茶事を催すようになっていきます。田中丸の茶事は九州にゆかりのある茶道具

を軸とした道具組みで、なかでも初期伊万里や柿右衛門、古伊万里、鍋島などの鑑賞陶磁は、従来の茶道具の基準からは外れていましたが、これらを菓子器や懐石の器として取り入れるという独特の茶風でした。

田中丸は古陶磁を茶事で用いるにつれ、それまでとは違った眼で古陶磁を観るようになっていきます。古陶磁というのは本来、器という実用の道具であって、単なる鑑賞用ではありません。そこには「観る」ことだけに終わらず、「選ぶ」と「使う」が含まれます。亭主は季節や年中行事、人生の節目、客の好みに応じて器を選び、料理との映りや、器と器の取り合わせに心を配ります。

そして、花入には花を、茶碗には御茶を、向付や鉢には料理を、徳利やぐい呑には酒を、というように器本来の使い方をしてこそ器が生き、そこに亭主の趣向や美意識が代弁されるのです。

田中丸はそうした趣向を思い巡らすことに、愉しみや喜びを見出すようになっていくのです。

### ■九州古陶磁を用いた宴

この頃から松風荘に客を招いては、九州古陶磁コレクションを宴席の器としても用いるようになっていきます。展覧会や図録でしか観ることができない桃山時代の古唐津の徳利やぐい呑で酒を酌み交わし、江戸時代の古伊万里や柿右衛門、鍋島の皿で夫人の手料理を味わいながらの古陶談義は、終始和やかな雰囲気です時が過ぎ、深夜に及ぶことも度々でした。

古陶磁研究家の佐藤進三や磯野風船子は、松風荘を訪れた時の様子を次のように語っています。

その都度、食卓には実際に古陶磁を使用されるのである。

唐津徳利にぐい呑、絵唐津の筒向付、現川の皿に刺身と云った懐石風に運ばれて出されるのであるが、いつも必ずまだ嫁がれぬ若いお嬢さんが次々と料理を運ばれて来るのがならわしである。

そして、その器はいつも秀れた古陶磁に奥様のお心入れの料理である。

朝鮮唐津の手鉢であり、古小代の大皿であり、色絵鍋島の向付であり、古伊万里の赤玉の鉢である。これら無傷物を惜しげもなく使用されることは全く驚くばかりである。

（「その性格と概要」佐藤進三著『玉屋コレクション』日本陶磁協会刊　1960）

田中丸さんのお扱いがよろしいので、ついいい気になって福岡へ行くと必ず田中丸邸を訪れて御所蔵品の拝見を願った。そうすると唐津や古伊万里などの名品を使用して御馳走をして下さった。古美術品の鑑賞は、使用して見てその本質がよく判るのである。大部分の蒐集家は大事にしすぎて、見せて下さるのがやっつである。それを使用されるのは茶会以外には全くない。

田中丸さんは御馳走を盛られると共に、お茶室で抹茶のおもてなしをして下さった。水指、茶碗茶入等、始終使用しておられるので生々していた。

いくら名品でもお蔵にしまいっ放しでは肌が死んでしまうのである。

（「大宛集家の横顔」磯野風船子著『とくさ』田中丸善八翁追悼集　1974）

こうした宴席では酒が入るため、客の知られざる逸話の数々が残ったりもします。

松風荘では芳名録代わりに「絵唐津木賊文茶碗」（出品No.1）を色紙に描いてもらっていましたが、自身が描いた絵に納得できず、後日描きなおした日本画家の東山魁夷。

酔いがまわると床の間に上がり、ドイツ語の歌を朗々と歌いだす陶磁学者の小山富士夫。

帰りの時間がせまり、まわりが促しても席を立とうとせず、仕方がないので二人して抱えようとする「いやじゃ、いやじゃ」といって駄々をこねだす`電力の鬼、こと松永安左工門。

松永安左工門は耳庵と号し、実業家としてもさることながら古美術蒐集家としてもその豪腕ぶりをみせ、気に入ったものがあれば非売品であれ茶友の持ち物であれ、お構いなしに所望する人だったようです。小林秀雄の随筆には古美術商から無理やり手に入れる耳庵のエピソードが出てきます。

醍醐寺の板画を大事にしていたが、Mさんが度々来て売れとしつこく言うのを、非売だと頑固に断っていたところ、或る日自動車で来て、見るだけでいゝから、というので見せているうちに、隣室に立った隙間に、抱えて逃げた、跣足で外に飛び出して追いかけたが、自動車だから間に合わぬ。

（「真贋」小林秀雄著『小林秀雄全作品19』新潮社刊　2004）

ここに登場する「Mさん」というのが松永耳庵のことです。この古美術商は一年近く耳庵の元へ通い詰めるのですが返してくれず、結局、当時の1,500円という金額で譲ることになったと言います。

そして、あるうことか田中丸自慢の水指も耳庵の標的にされたのです。

#### ■松永耳庵との風流な攻防

ある日、耳庵が松風荘を訪れた際、宴席の前に松風庵の小間で薄茶を一服差し上げました。この日の水指は「豆狸」という銘の朝鮮唐津で、表千家11代の碌々

斎が大徳利の上半分を切り取り、唐人笠のような蓋を手捏ねで作って水指に仕立てたものです。

「ほお一、珍しいもんだねえ」と耳庵も感心し、「蘇東坡」という追銘まで付けてくれました。

後日、田中丸宛てに小田原から一通の封書が届きます。差出人は耳庵。その手紙にはこう書かれていました。

豆狸はいつ小田原の山に逃げ出すか分からない御用心　御用心

――まるで予告状のような手紙からひと月ほどして、ふたたび耳庵が松風荘を訪れます。

「お忙しいのにどうも」と田中丸は笑みを浮かべながら玄関で出迎えます。田中丸の傍らには何やら古めかしい衝立が置かれていました。耳庵の目に留まり、しばらくその衝立を眺めていましたが、田中丸の意図することがわかったらしく、顔を見合わせて二人で大笑いしましたのです。

その衝立には仙崖和尚の筆で次のような呪文が書かれていたのです。

くわばら、くわばら

これは「怖いことが起こりませんように」という意味で、古くから災難を避ける際に唱えるおまじないですが、この田中丸の機転を利かせた演出が功を奏し、それ以来、耳庵の口から豆狸の話は出なくなったものの、田中丸はやはり用心して耳庵の目には触れさせなかったと言います。

――昭和48年(1973)2月6日、田中丸は78年の生涯を閉じます。

その訃報に接し、度々、松風荘を訪れていた前出の小山富士夫は嘆きました。

「田中丸さんが亡くなられて、何か九州が虚ろになったような気がする」と――。

〔一般財団法人田中丸コレクション
学芸員　久保山炎〕